

超一流の人間の共通点

私はさまざまな方とお会いしてお話をしますが、学者でも経営者でも作家でも、どんなお仕事もされている方でも、超一流と言われる方たちはみなさん謙虚でいらつしやいます。

その道では大家たいかとか大御所と言われるような方たちが、自分の能力や地位に驕おごることなく、「私などは、まだまだ未熟です」とおっしゃるのです。自分の才能や実績を誇示するようなことは、一切おっしゃいません。

その慎み深いものごしに接したときに、私は深く感銘を受けるとともに、自身の小ささを自覚して、襟を正す思いになります。

『老子』の中に、「上善じょうぜんは水の如ごとし」という有名な言葉があります。上善とは、

最上の生き方のことですが、それは水のようなものだというわけです。

私たち人間は、自分を上に見てもらいたいと焦ったり、人と接するときも、自分のほうを上位の優位なポジションにもっていかうとすることがあります。

一方、水は自ら低いところへと流れていくので、他と競争することがありません。自ら低いところへ身を置こうとするこの謙虚さと、どんな形にも変化する柔軟さが水の特長であり、それこそが私たち人間にとっても最上の生き方だと、老子は教えてくれるのです。

ふつう私たちは、何かで成功を収め、それなりの地位や実績を手に入れると、「自分がすごいから成功したのだ」と驕おごってしまいがちです。そして、才能や地位や実績を誇示したくなります。

しかし、このように謙虚さを失った状態では、自らの生き方を深く反省することがないので、人間として成長できません。

一方、超一流のレベルにまで到達する人は、謙虚さがあるからこそ、常に自ら

を省みることができ、人間としてどこまでも深く大きく成長していけるのです。

では、この謙虚さはどこから生じるのでしょうか？ 私は、謙虚さの源になるものは次の二つだと思っています。

一つは、「おかげさまの精神」です。おかげさまの精神とは、「自分の力で生きている」と考えるのではなく、「自分は、水や空気や太陽のおかげで、大自然のおかげで、ご縁あるたくさんの人々のおかげで生かされている」と考えることから生じる、「慎みをとまなう深い感謝」です。

これは、「何かいいことがあったから感謝する」という条件付きの感謝ではなく、「今こうして生かされているだけでありがたい」という無条件の、最上級の感謝です。

この精神を内にもつ人は、どんなに成功しても、それを自分の手柄てがらと考えて自己満足するのではなく、それを自分の役割や使命と考えて感謝します。「おかげ

さまで、ここまで来させていただいた。自分の役割があるというのは幸せなことだ。さらに自分の役割を全うして、世の中にもっと恩返ししたい」という心境になるのです。

こうなると、競争相手を意識することもないし、仮にナンバーワンの状態になったとしても、それに満足して止まってしまうこともありません。このような心境になった人が、どこまでも高みに上っていかれるのは当然かもしれません。

謙虚さの源となる二つ目のものは、「本物の自信」です。

私たちは、自分に自信をもてないときに、才能や地位や実績によって自分を飾ろうとします。そのままの自分ではだめだと思うから、自分を他人から認めてもらうための証拠を集めたくなるのです。

そしていつの間にか、その証拠（才能や地位や実績）と自分を同一視してしまします。つまり、自分のアイデンティティ（自分が自分である証あかし）を、才能や地位や実績に置いてしまうのです。

だからこそ、自分の価値を証明するために才能や地位や実績を得ることに必死になり、それらを手に入れた結果、「自分はすごい人間になった」と錯覚するのです。この場合、「才能や地位や実績を手に入れたからこそ、自分には価値がある」という考えになってしまうので、まだそういったものを手に入れていない人を見下げるようになり、謙虚とは程遠い、傲慢ごうまんな人間になってしまいます。

一方、本物の自信をもっている人は、「能力や地位や実績に頼らなくても、自分の存在はそのまま素晴らしい」と感じているので、自分を能力や地位や実績と同一視することがありません。成功して能力や地位や実績が手に入っても、「自分が偉くなった」と錯覚することはなく、むしろ「たくさん与えられてありがたい」と感謝するようになるのです。

また、本物の自信があるからこそ、謙虚ではあっても決して卑屈にはならず、つつましさの奥から輝きが感じられるような、そんな存在感を周囲に放つのです。

ナイチンゲールが書簡の中で、「人間は賞賛を勝ち得ているときに、最も危険なときである」と語っています。また、『菜根譚』にも、「順調にいつているときほど、慎みを忘れないようにしなければならぬ」という意味の言葉が出てきます。

私たちは、人生が順調なときで、まわりから高い評価を得ているときに、謙虚さを失ってしまいがちなのです。心しておきたいものです。

一方、人生で大きな困難や逆境に直面したとき、私たちは謙虚になるチャンスを与えられていると言えます。それは、順調にいつているときのありがたさに感謝するチャンスであり、また、自らの生き方を深く反省して、人間として大きく成長するチャンスなのです。

順調なときこそ謙虚になり、また、逆境に出合っても謙虚になる。そんな生き方を実践していった先に、私たちは超一流と言われる人間になるようです。